

お茶の里へ ウエルカム

外国人観光客に魅力発信

「日本茶800年の歴史散歩」の日本遺産登録や府の「お茶の京都」キャンペーンを追い風に、和束町や宇治田原町でインバウンド（訪日外国人観光客）を呼び込む取り組みが行われている。茶関係の仕事を経験するインターンシップや外国人向けゲストハウスなどで地域の魅力を知ってもらう。（米沢幸雄、住吉哲志）

和束 栽培や製茶 インターンシップで



インターンシップに参加し、日本茶の飲み比べをする外国人（和束町園・おぶぶ茶苑）

「こっちの方が少し苦い」「味の違いは微妙ね」。ネット通販を展開する宇治茶販売「おぶぶ茶苑」（和束町園）の研修施設で18日、フランス、イタリヤ、オランダ人の女性3人が日本茶

のこを学ぶため産地や収穫時期が異なる玉露や煎茶などの飲み比べをした。3人は、おぶぶ茶苑が2012年に始めた3カ月間のインターンシップ制度に参加し、栽培

や製茶作業を手伝う。いずれも母国で日本茶の販売を考えており、オランダ人のリセット・レイライフアーさん（25）は「欧米で日本茶はほとんど知られていない。オランダで広めたい」と語る。

また、06年に移住した同町南の茶農家植田修さん（35）は、外国人に宿泊場所と食事を用意し、農作業を学んでもらっている。植田さんもタイなどに滞在し、農業をした経験がある。「とても楽しかったので、きつと同じ体験をしたい人は多いはずだ」と話す。

和束町では15年度の訪日外国人観光客数が3482人と前年度比で約11倍と急増した。堀忠雄町長は「町内に滞在した外国人が、ネットや口コミで町の魅力を発信してくれることが増加につながっている。若い世代の地道な取り組みのおかげだ」と喜ぶ。

宇治田原 小屋をゲストハウスに



外国人観光客向けのゲストハウスの内部。製茶小屋を改装している（宇治田原町岩山）

宇治田原町岩山では、築100年の製茶小屋を使った外国人向けゲストハウスの改装が進められている。町内で革新的なビジネスモデルづくりを目指す「ソーシャルイノベーション宇治田原」が企画。山本理文代表（29）は「宇治田

原は茶の町。だから茶にまつわるストーリー性を出したくて製茶小屋を選んだ」と語る。建物は木造平屋の55平方メートル。壁には縦横約2メートルの特注のガラスをはめ込んで眺望を良くするほか、台所や洗面所などの壁紙には綾部市の黒谷和紙を使う。太いはりむき出しのまま、わらがはみ出ししている土壁をあえて残す。定員8人で7月に完成する予定だ。

今年29日には、ゲストハウスを会場に外国人観光客が製茶や抹茶ひきなどを体験するツアーが予定されている。山本代表は「インバウンドを呼び込み、将来的に定住や移住につなげたい」と語る。府は、南部地域の活性化戦略として「お茶の京都」の国内外へのアピールを本格化させている。担当の小川嘉幸理事は「PRや交流から定住移住につながる取り組みにも支援していきたい」と話す。

